

「人はどこから来てどこへ行くのか」 ヨハネによる福音書 8:12-20

教会の暦によりますと、今日、11月第一の日曜日は「聖徒の日」（永眠者記念日）となっています。かつて、ローマカトリック教会においてこの日は「諸聖人の日」として、ローマ教皇によって「聖人」として認められた特別な教職・信徒の遺徳を偲び、その徳を讃える日であったようです。しかし、宗教改革以後、プロテスタントの教会では、すべてのキリストにあって天に召された人々のことを偲び、天にある兄弟・姉妹たちと、地にある私たちが、心を合わせて、共に主なる神を讃える日として、この日を守ってまいりました。

私たちの七里教会では、先ほどお名前を読ませて頂いた21名の方々が、天に召されて、神さまの御許で復活の明日を待っているのです。私はこの21名の方々のことについて、ほとんど存じ上げませんが、はっきり言えることは、これらの方々は皆、イエス・キリストの執り成しと、贖いの恵みによって、神の御許である天に場所を与えられて、そこで憩おっておられるということです。そしてやがて私たちも、この地上での役目が終わった時には、天にあるそれらの兄弟姉妹たちと、お会いし、一緒になれるということです。私たちが、共にキリストの恵みにあずかり、永遠の命を与えられているということは、そういうことです。

先週、私たちは「宗教改革記念日」の礼拝を守り、ルターの宗教改革のきっかけとなった「贖宥券」（免罪符）のことについて話しました。このような「天国行きの切符」が考案され、それが人々の間でバカ受けした背景には、死後の世界に対する人々の不安と恐怖心が強くあったためです。それは現代においても同じです。死は誰にとっても未知の世界であるだけに、不安であり、恐れが伴います。私は、子どものころ、お寺に掛かっている地獄絵を見て、血の海や火の海で悶え苦しんでいる人や、閻魔大王に舌を抜かれている人の絵を見て、怯えたものです。仏教では、そのような地獄絵を通して、嘘をついたり、悪いことをしたら、地獄でこんな苦しみに合うということを示し、仏の道を説いたわけです。これと同じようなことが、中世のヨーロッパの教会でも、行われていたのです。亡くなった親兄弟が、「煉獄」で苦しんでいる。その煉獄の苦しみから、親兄弟を解放し、天国に行けるように、善行に励みなさい。「切符」を買って大寺院の建築に協力しなさいと説いたわけです。「煉獄」という、死者がその罪のゆえに、恐ろしい苦しみを受けるという考えは、当時の人々が抱いていた、死に対する不安と神の裁きに対する恐れから生み出された考えであって、聖書的な考えではありません。

聖書が私たちに教えていることは、神さまは、私たちが一人も滅びないように、御子イエス・キリストをお遣わしになったということであり、その御子が、私たち人間の罪を背負って、私たちに代わって死んでくださったことにより、私たちの罪が赦され、「たとえ死んでも生きる」という、「永遠の命」が約束されている、ということです。私たちは、ただイエス・キリストを信じる信仰によって「義」とされ、イエス・キリストの死と、復活の命にあずかり、主の御許で憩おうことが許されているのです。

「死」は、人間にとって避けることの出来ない定めですが、キリストにあって、死は滅びではなく、一つの通過点に過ぎず、新しい命の始まりでもあるのです。

私の尊敬する鈴木正久牧師は、今から50数年前、教団議長として活躍されていた時、肝臓がんで亡くなられました。お嬢さん(玲子姉)を通して「お父さんは末期ガンで、余命数ヶ月だ」と聞かされた時、先生は一瞬、目の前が真っ暗になり「明日がない」と思ったそうです。そして「明日のない自分にとって、今日という日にどういう意味があるのか」生きている意味が分からなくなったそうです。しかし、娘さんから聖書の「フィリピの信徒への手紙」を読んでもらい、「あなた方の中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださる」(1:6)というパウロの言葉を聴いた時、「そうだ、私たちにはキリストの日という明日があるのだ」と気付かされ、「その永遠の明日に向かって、今日という日を精一杯に生きよう」という勇気と希望を与えられ、病床から、牧師としてのまた教団議長としての務めに励まれたのです。その病床から教会員に送ったメッセージ(録音)の中で、鈴木牧師はこんなことを述べています。「私が死んだあと、天国に行けるかどうかは自分にもわからない。しかしもし、自分のような罪深い者でも天国にいけなしたら、キリストの沽券(こけん)にかかわるだろう」。これは鈴木先生らしいユーモアをもって語られた信仰告白です。イエス・キリストを通して示された神の愛と恵みは、「御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため」(ヨハネ 3:15)だからです。

この教会から天に召された21名の兄弟姉妹たちも、それぞれの人生を歩み、道半ばで天に召されたことと思います。私たちの人生に「完成」はないのです。みんな未完成のまま、「そこまで!」という神さまが定めに従って、天に召されたのですが、「キリストの日」に神さまがすべてを完成してくださるという希望をもって、待ち望んでいるのです。私たちもそのような希望をもって、夫々の人生を精一杯に生きたいものです。

さて、今日のヨハネ福音書8章12節以下の箇所は、7章からずっと続いているユダヤ人の律法学者やファリサイ派の人々との論争の箇所です。イエスさまは、エルサレムに、自分のことを妬み憎んで、殺そうとしているユダヤ人たちが大勢いることを知りながら、「仮庵の祭り」に密かに上京し、そこでも多くのしるしと言葉によって、父

なる神さまのみ心を証しましたのです。イエスさまは、神さまから示された十字架の死の時を「わたしの時」と定め、その時に向かって、今、語るべきことを語り、為すべきことを為さなければならないという、緊迫した思いで一日一日を過ごされたのです。

そのような中で、今日の箇所、イエスさまが語られた言葉は、「わたしは世の光である」という言葉でした。ヨハネ福音書の記者は、この福音書の冒頭で「まことの光があつて世に来た。光は暗闇の中に輝いている」(1:5)と主イエスのことを紹介しましたが、ここではイエスさまご自身が「わたしは世の光である」と宣言されたのです。

「わたしは世の光である。わたしに従う者は、暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(12節)。私たちの住むこの世には、多くの「闇」があります。表面的には明るく見えますが、長引くコロナ禍の中で、生活の面でも精神面でも追い詰められ、暗い闇の中で喘いでいる人たちが少なくありません。また地球温暖化や、自然災害などの不安や心配があります。また、国際的な緊張の中で、戦争への不安が高まりつつあります。もし核兵器が使用されるようなことになったら、人類だけではなく、地球そのものの破滅です。腐敗した政治の中で一人一人の命が危機に晒され、まさに闇に包まれた時代です。

文豪ゲーテは、亡くなる前、死の床から高く天に手を伸ばして「もっと光を!」と叫んで、息を引き取ったと言われます。もっと光を! これは、現代の私たちの叫びでもあります。いつの時代も、人々は死の支配する闇の中から、光を求め続けてきました。

そのような暗い闇に閉じ込められているような私たちに向けて、主は「わたしは世の光である」と言われ、「わたしに従う者は、暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と言われたのです。なぜ、イエス・キリストが「世の光」であり、主に従う者に「命の光」が与えられると言われたのでしょうか。

当時のファリサイ派の人々は、この言葉を聞いて、すかさず反論しました。「あなたは自分について証しをしている。その証は真実ではない」(13節)と。当時、律法によれば、真実な証言には、二人以上の証人が必要だとされていました。裁判などで、一人の人がどんなに真実を語っても、二人以上の一致した証言がないと、「真実」とは認められなかったのです。彼らはそのような理由から、「あなたの言っていることは真実ではない」と言ったのです。そこでイエスさまが言われた言葉が、14節です。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っている。しかしあなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない」。イエスさまがここで言わんとしたことは、「わたしは、神から遣わされてこの世に来て、そして父なる神のもとに帰る”神の子”である」ということです。ですから「わたしが語る言葉は、父なる神も証言しておられることである」ということです。つまり、イエスさまは、自分だけの判断や思い付きで

勝手なことを言っているのではなく、父なる神のみ心でもある、ということです。

キリスト教の信仰は、人の子としてこの世に遣わされたイエス・キリストを神の子として受け入れ、主イエスの言葉を神の言葉として聴くことです。ファリサイ派の人々の無理解は、このイエスさまが「どこから来て、どこへ行くのか」という最も基本的なことを理解しようとしなからだ、というのです。

この「どこから来て、どこへ行くのか」という問いは、私たち一人一人にとっても、大変重要な問いではないか、と思います。「人はどこから来て、どこへ行くのか？」この問いは、「私たち人間は何者か？」という最も基本的な問いで、古代から問われて来た永遠の問いだと思います。聖書の創世記によると、「人は、神によって土の塵から造られ、土に帰る」存在として描かれています。これは、実にリアルな表現だと思います。確かに人はみな、死ねば土に帰るのです。人体を構成している元素は、土の成分と同じ窒素やリンやカリウムやナトリウムなどという同じ元素から成っているそうです。私たち人間は、神の前に皆、取るに足りない、はかない存在なのです。しかし、神さまは、そのような土の塵で人を御自身の形に似せて造られ、その鼻に命の息を吹き入れ、「生きた人」とされたのです。この命の息は、「霊」を意味する言葉です。私たちは、神さまから命の息を与えられて生かされているのです。そして人は、それぞれのこの世での務めを終えた時、神によって命の息を引き取られ、私たちの肉体は土に帰るわけです。しかし私たちは、「無」になるわけではありません。神によって引き取られた「霊」は、イエス・キリストの死と復活の恵みによって、神の御許で生き続けるのです。ここに私たちキリスト者の希望があるのです。パウロが、コリントの信徒への手紙(2)の中で「わたしたちは、土の器の中に宝を納めている」と言ったのは、このことです。この「宝」とは、イエス・キリストの十字架と復活を信じる信仰です。この信仰によって「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰らず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」のです(4:7-9)。

宗教改革の時代に作られた「ハイデルベルク信仰問答」の第一問は、「生きる時も、死ぬ時も、あなたのただ一つの慰めはなんですか」という問いです。そしてその答えは、「わたしが、身も魂も、生きている時も死ぬ時も、わたしのものではなく、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることとあります」となっています。私たちキリスト者は、「キリストのもの」として、「神によって生かされ、神の御許に宿る」道を備えられているのです。この闇の世を照らす光として来られた主イエス・キリストの光に照らされ、導かれて、私たちも「命の光」を輝かせ、「世の光」としての歩みを全うしたいものです。先に召された先達たちも、天からそのような声援を私たちに送り、励ましておられることと思います(ヘブライ 12:1-3)。 アーメン